

B. ラッセルの権力論

野 村 博

1 は じ め に

「この本のなかで私は、『エネルギー』が物理学の基本概念であるのと同じ意味において、社会科学の基本概念が『権力』であるということを証明したいと思う。エネルギーと同じように、権力にも多くの形態——たとえば、富、軍備、文官の権威、世論に及ぼす影響力というような形態がある。これらのうちのいずれか一つの形態が他の形態に従属していると考えことはできないし、また他の諸形態を派生させるような一つの形態が存在するわけでもない。たとえば富というような権力の一つの形態を他の形態の権力から孤立させて扱おうとすることは、ただ部分的にしか成功をおさめることができない。それはちょうど一つの形態のエネルギーを研究するときに、他の諸形態のエネルギーをも考慮に入れなければ、どこかの点で欠陥が出てくるようなものである。富は、軍事力から結果として生じることもあれば、世論に及ぼす影響力から由来することもあり、それは軍事力や世論に及ぼす影響力が富の結果として生じてくることがあるのと同じである。社会力学の法則は、あの形態この形態という特定の形態の権力の点からではなくて、ただ権力という点からみてはじめて述べることができる法則である。かつて軍事力は、他の形態の権力からきりはなして考えられた。その結果、勝敗は指揮者の偶然の性質次第によるように思われていた。今日では、経済力を他の形態の権力がすべて派生してくる源泉として扱うのが普通である。しかしこれは、時代おくれだと思われるようになった純軍事的歴史家たちの誤りとまったく同じ大きな誤りである、と私は主張したい。さらにまた、宣伝を権力の基本的な形態だと考える人々がいる。これは決して新しい見解でもない。『真理は偉大にして流行する。』(Magna est veritas et praevalebit.) や、『殉教者の血は教会の種子である。』というような伝統的な諺にも具体的に表現されているのである。それは軍事的見解や経済の見解とほとんど同じ程度の真理と虚偽を含んでいる。宣伝は、ほとんど異議のない一致した世論をつくり出すことができれば、抵抗できない権力を生み出すこともできる。しかし、軍事力や経済力をもっている人々は、その気さえあれば、軍事力や経済力を宣伝目的のために用いることもできるのである。再び物理学との類比にもどっていえば、エネルギーと同じように権力も、たえず一つの形態から他の形態へと移っていくものと考えなければならないし、このような変形の法則を探索することが社会科学の本分でなければならない。ある一つの形態の権力、今日ではとりわけ経済力を、他の形態の権力からきりはなそうとする試みは、実際的に非常に重大な誤りの源泉であつたし、今もなおそうである。」¹⁾

バートランド・ラッセルは、その著書『権力——新しい社会的分析』(*Power: A New Social Analysis*, 1938)の「序論」ともいえるべき第1章「権力への衝動」のなかで、以上のように述べている。

従来、権力は政治学の基本概念の一つとして、政治権力として把握されるのが一般の通例であったが、ラッセルは、上に引用したとおり「『エネルギー』が物理学の基本概念であるのと同じ意味において、社会科学の基本概念が『権力』である」という立場に立って、権力をもっと広い総合的・多面的な視点から把握して、社会の諸問題を分析していこうとする。

ではラッセルにおいて、権力とは具体的にどういうものなのか。以下の小論において、『権力論』をとおして彼の説くところをやや詳細に眺めていきたい。それだけが、この小論の取りあえずの目的である。

2 権力への衝動

ラッセルによれば、人間が動物界で特異なのは、激情と衝動の点においてではなく、知性と想像力という能力においてであるが³⁾、しかし感情の面からみても、人間の欲望のなかには動物の欲望とは異なって、「本質的にいつて無限で、完全に満足させることのできないもの」³⁾がある。一次的に主要な欲求が満たされた後にも、人間は、たえず想像力に突き動かされて無理にも休みなき努力へと駆り立てられる。人間の果てしのない欲望のうちで主要なものは、権力と栄光とに対する欲望である。権力欲と栄光欲とは、決して同じものではないが、密接な関係をもっていて、行動の動機からいえば一つとも考えられよう。⁴⁾

正統派経済学者もマルクスとともに、経済的な私利私欲を社会科学の基本的な動因と考えた点で共通の誤りを犯している。人間は適度の慰めが保障されると、富よりもむしろ権力を追求するようになる。権力に対する手段として富を求める場合も、権力を増すために富の増加を割愛する場合も、ともに根本的な動機は経済的なものではないのである。「権力愛こそ社会的な事柄において重要な諸活動の原因である、ということを認めることによってはじめ、古代史にしる近代史にしる歴史は正しい解釈をすることができるのである。」⁵⁾

権力愛の強くない人々は、世の中の出来事の流れに大きな影響力を及ぼすことはないであろう。社会の変革をひきおこす人々は、概してそういうことを強く欲する人々である。したがって、権力愛は、社会の変革の原因として重要な人々の特徴をなすものである。しかし、ラッセルによれば、もとより権力愛を唯一の人間の動機であると考えるならば誤りであろう。だがこの誤りは、社会科学における因果法則の探求という点で考えられているほど、誤っているものではない。というのは、「権力愛こそ、社会科学の研究しなければならない諸変化を生み出す主要な動機だからである。」⁶⁾

ところでラッセルによれば、権力への衝動には二つの形態がある。すなわち、指導者 (lead-

B. ラッセルの権力論

ers) にはっきりと現われる権力衝動と、追従者 (followers) に暗黙のうちに含まれる権力衝動とである。人々がすすんで指導者に従う場合、それは彼らが指導者の支配している集団の力で権力を獲得しようとするからであって、追従者にとって指導者の勝利は自分たちの勝利だと感ずるのがある。大抵の人々は、自分たちの所属する集団を勝利に導いていくために必要な能力が自分たちにあるとは感じていないから、覇権を成就するのに必要な勇気と利口さをもつように思われる統率者を探し出すのである。そして、純粋に心から協力的な仕事の場合には、心理的にいって追従者も指導者とまったく同じように決して奴隷ではない。このような心理のためにこそ人間は、組織のためにやむをえず生まれてくる権力の不平等、しかも社会が組織的になるにつれて減るよりもむしろますます増えていく傾向のある権力の不平等に、我慢していくことができるのである。

権力配分の不平等は、我々の知識が及ぶかぎりどこまで歴史をさかのぼってみても、人間の社会にはいつも存在してきた。これは、一部には外的必然性によるものであり、また一部には人間本性のなかに見出されるはずの諸原因によるものである。ラッセルによれば、およそ屈従の衝動は恐怖心に根があり、攻撃性も恐怖心に根ざす場合がしばしばあるが、偉大な指導者には単に外観だけではなく潜在意識にまで深く浸み込んでいる異常な自信がある。「指導者の地位を獲得するためには、権威を与えてくれるような自信、敏速な決断、正しい措置を決定する巧妙さという特質の点で卓越していなければならない。」⁷⁾ だから指導権は、相対的なものである。しかしながら、「無政府状態のあとでは独裁制が自然の第一歩である。というのは、独裁制は支配と屈従の本能的なメカニズムによって促進助長されるからである。……平等な協力は、独裁制よりもはるかにむずかしく、ましてや本能と一致するものではない。」⁸⁾ 独裁制に陥らないようにするためには、したがって、無政府状態を回避した指導者と追従者の関係、つまり民主的な政治が望まれるのである。

指導者と追従者のほかに、いわば第三の型として撤退者 (those who withdraw, 脱落者) つまり、「支配したいという願望の原因になる傲慢さはもってはいないが、屈従を拒否する勇気はもちあわせている人々」⁹⁾ が世の中には存在する。この型の人々は、ラッセルによれば、容易に社会機構に合わず、多少なりとも孤独の自由を享受できる避難所を何とかして求めるが、歴史的にみて、初期キリスト教徒、アメリカのパイオニア、トルストイなどのように、大きな重要性をもつことも時々ある。

しかし、それはともかくとして、指導者として成功するためには、自分に従ってくる追従者に対する自分の権力を楽しむ気持ちが必要ではない。しかも従来指導者は、理性よりも感情を、頭脳よりも血を、個人的であるよりも集団的な生活の要素を、高く評価するために、集団的な興奮のもつ喜びを醸し出すべく弁舌さわやかな雄弁を利用する。もっとも、権力を愛する人々がすべて雄弁家の型に入るわけではなく、むしろ、機械を自由に操作し、それによっていっそう権力愛の心をつのらせてきたという型の人間もある。「雄弁家は古い型であり、機

械にもとづいた権力をもつ人間は新しい。」¹⁰⁾そして、「広汎な機械力を意のままに動かせる人間は、もし抑制されなければ、自分を神のように、——キリスト教の愛の神ではなく、北欧神話の雷神トールやローマ神話の火と鍛冶の神バルカンのように、おそらく感じることであらう。」¹¹⁾

このように権力衝動を指導者と追随者のなかに認めるとともに、指導者が今日機械力を自由に意のままに活用操作することによって権力を獲得する状況を眺めたラッセルは、次のような警告を発するのである。「昔は人々は魔術的な権力を得るために、自分を悪魔に売りとばした。今日では、こうした権力を人々は科学から得て、いつのまにか自分が悪魔になるべく駆り立てられているのに気づくのである。権力を馴致して、狂信的な暴君たちの特定の集団に奉仕させるのではなく、人類全体——白人であろうと黄色人種であろうと黒人であろうと、あるいはまたファシストであろうとコミュニストであろうとデモクラットであろうと、人類全体のために奉仕させることができなければ、世界には希望は存在しない。というのは、科学は、万人が生きるか死ぬかしなければならぬことを不可避免的なものにしてしまったからである。」¹²⁾

3 権力の形態(1)

ところでラッセルにおいて、「権力」とはいったい何か。「権力とは意図した結果を生じさせるもの (the production of intended effects) である」¹³⁾と彼は定義する。たとえば、ここに二人の人がいて、同じような欲望をもっている場合、もし一方の人が他方の人の達成した欲望をすべて達成し、さらに他の欲望をも達成したとすれば、一方の人の方が他方の人より権力を多くもっていることになる。しかし、一方の人がある種の欲望を達成し、他方の人が別種の欲望を達成したというような場合には、これら二人の人の権力を正確に比較する方法はない。例をあげれば、いい絵を描いて金持ちになりたいという二人の芸術家があって、その一方はいい絵を描くことに成功し、他方は金持ちになることに成功した場合、いずれの方が大きな権力をもっているのかを評価する方法はまったくないのである。それにもかかわらず、大まかにいって、一方の人が多くの意図した結果を達成し、他方の人がわずかしき達成しなかったとすれば、一方の人の方が他方の人よりも大きな権力をもっている、といえるだろう。このように説明してラッセルは、だから権力は「量的な概念」¹⁴⁾であるという。

権力の形態を分類する方法には、さまざまあって、そのいずれにも効用はあるが、ラッセルは、まず人間に対する権力と生命のない物質に対する権力とに分け、本書では主として人間に対する権力について述べるが、しかし、近代世界の変化の主要原因が科学による物質に対する権力の増大であることを忘れてはならないと力説する。

さて、人間に対する権力は、個人に影響を及ぼす及ぼし方か、またはそれに伴う組織の型か、

B. ラッセルの権力論

によって分類できる。そしてラッセルは、個人に対して及ぼす影響として、三つのものを列挙する。(1)身体に対する直接の物理的な力。(2)誘いとしての賞罰。(3)意見に及ぼす影響、すなわち最も広い意味の宣伝。このような権力の形態は、我々が動物を扱う場合に最も赤裸々に単純に示されるが、人間の場合にも同じである。¹⁵⁾

最も重要な組織は、組織が行使する権力の種類によって大体区別することができる。すなわち、軍隊と警察は、身体に対する強制力を行使するし、経済組織は主として賞罰を誘引ないし抑止に利用するし、学校・教会・政党は意見に影響を及ぼすことを目指す。もとよりこのような区別は、大してはっきりしたものではないだろう。というのも、組織というものはすべて自分に最も特有な形態の権力のほかに他の諸形態の権力をも利用するからである。そして、このような複雑な形態の権力を例証するものが法の権力である。

そこでラッセルは、権力について今一つ別の重要な区別をする。すなわち、(1)伝統的権力(2)革命的権力(3)赤裸々な権力、という区分である。「伝統的権力」は、単に古い形態の権力だから伝統的と呼ぶのではなく、習慣による尊敬をも集めていなければならない。「革命的権力」は、たとえばプロテスタンティズム、コミュニズム、あるいは国家の独立に対する願望というような新しい信条・綱領または感情によって統一された一大集団に権力が依存しているとき、伝統的権力によって必要とされる以上の活発で積極的な人民の支持を必要とするものである。そして、このような伝統や同意にもとづかない権力をラッセルは、「赤裸々な権力」と呼ぶのであって、この権力は通常は軍事的なもので、国内の暴政か外国の征服かいずれかの形をとるが、単に権力が個人または集団の権力愛の衝動だけから出てきて、積極的な協力ではなしに恐怖による屈従だけをその服従民からかちとっている権力であり、いわば恐怖にもとづく権力である。

さらにもう一つの区分は、ラッセルによれば、組織の権力と個人の権力との間にある。というのは、一つの組織が権力を獲得する方法と、個人が組織のなかで権力を獲得する方法とは、まったく別問題だからである。もちろん、この二つは相互に関係していて組織の型が異なれば個人の型もまったく異なってくる。そこでラッセルは、権力の型が異なるにつれて生み出される個人の種類として、次のような五つのものを挙げている。

- (1) 世襲的な権力が生んだ「紳士」の観念。
- (2) 学問や知恵をととして権力が得られた知識人。(僧侶の精神上の子孫)。
- (3) 大経済組織の発達によって生み出された新しい型の権力をもった個人——アメリカでのいわゆる「行政的手腕家」。
- (4) 民主主義国家において民主主義を廃棄して独裁者となることに成功した政治的権力の所有者。
- (5) 黒幕の権力、重臣・策謀家・スパイ・陰の人の権力。

4 権力の形態 (2)

ラッセルは、過去において最も重要であった伝統的権力として、僧侶の権力と王権について、その歴史的な役割りと消長に分析のメスを加えたあとで、「伝統的権力を支えてきた信念や習慣がすたれるにつれて、この権力は何らか新しい信念にもとづく権力か、あるいは『赤裸々な』権力、すなわち服従民の側に従順さを伴わないような権力か、そのいずれかの権力に徐々に屈していく。」¹⁶⁾と述べて、まず「赤裸々な権力」について論じていく。

この赤裸々な権力は、いわば羊の群に対する屠殺者の権力、敗戦国民に対する侵入軍の権力、悪事の発覚した犯人に対する警察の権力のようなものである。もともとこの権力は、伝統的な信念がすたれて、これを継ぐべき新しい信念もなく、したがって個人の野望をさえぎる制限が何もない状況に現われるものであるから、通常その期間は短いのであって、外国の征服か、安定した独裁権の確立か、あるいは新興宗教の勃興か、そのいずれかとなって終息する。

要するに権力は、服従民がその権力を単に権力であるという理由だけで尊敬するような場合には、赤裸々なものとなるから、伝統的であった権力はその伝統が服従民によって受けいれられなくなるやいなや、赤裸々となるのは必然である。人類の歴史において実に忌むべきことのほとんどは、——たとえば奴隷制度と奴隷売買、コンゴ族の搾取、初期産業主義の恐怖、児童虐待、拷問、刑法、牢獄、貧民労働者の授産所、宗教上の迫害、ユダヤ民族の虐待などは、この赤裸々な権力と関係があり、この権力が守る術のない犠牲者に対して権力を行使した例である。¹⁷⁾

ところで、伝統的な制度が解体する場合に、この旧制度の基礎となっている信条や精神的習慣が単なる懐疑に負けてしまうときに社会的結合を維持できるものは、ただ赤裸々な権力しかありえない。しかし、新しい精神的習慣を伴う新しい信条が次第に人々に対し支配力をもってきて、ついには古くさくなくなったと感じられる政府の代わりに新しい確信と調和する政府を置き代えるにたるほど強くなった場合、そこに確立される権力をラッセルは「革命的権力」と呼ぶのである。なるほど、革命が成功した場合に、革命によって樹立される制度がやがて伝統的なものとなり、また革命の闘争が厳しく長びけば、赤裸々な権力を求める闘争に変質することがしばしばあるのも事実である。しかし、ラッセルによれば、それにもかかわらず新しい信条を固守するものは、心理的にいって、野望のある冒険家とはまったく異なるし、彼らの及ぼす影響の方がはるかに重大で永久的なものである。

伝統ないし習慣による尊敬にもとづく伝統的権力、恐怖に依拠する赤裸々な権力、同意にもとづく革命的権力、——この権力の区分は、いうまでもなく心理的な区別であって、社会現象を歴史とともに人間性ないし人間心理を基調にして考察していこうとするラッセルの態度が如実に示されているのである。

B. ラッセルの権力論

さてラッセルは、ひきつづき政治的な権力とは異なる他の形態の権力について、考察をすすめていく。「経済的権力は、軍事的権力とは異なって、一義的なものではなく派生的なものである。」¹⁸⁾ 一国内では経済的権力は、法律に依存しているが、国際間では大きな問題の解決になると法律ではなく戦争または戦争の脅威によっている。経済的権力を分析することなく受け入れるのが通例になっているが、そのために今日、歴史を因果的に解釈する場合にも戦争や宣伝とは対立したものとしての経済に不当な強調がなされることになってきたのである。ラッセルによれば、「労働の経済的権力は別として、他のすべての経済的権力は、究極的に分析すると、誰が一定の土地に立ってそこへものを持ち込み、そこからものを取り出すことが許されるかということを、必要とあらば武力を用いてでも決定することができることから成り立っている。」¹⁹⁾ したがって、個人の経済的権力も、誰が土地に対する権力をもつかについての一組の規則にしたがい、必要ならば武力を用いる政府の決定に依存していることになる。これに対して政府の経済的権力は、一部はその武力に、一部は条約や国際法に対する他の政府の尊重に、依存している。

だから経済的権力と政治との関連は、ある程度まで相互的である。つまり一群の人々が結合して軍事的権力を獲得し、それを獲得してから経済的権力を所有することがある。もっとも、彼らが結合する最初からの動機が経済的権力を最終的に獲得することである場合も事実であろう。しかし、経済的権力を所有することが、軍事的ないし宣伝の権力を所有することになるかも知れないし、またこれとは正反対の過程も同じように起こりがちである。要するに経済的権力は、政治・軍事・宣伝など他の形態の権力と相互的なものである。そこでラッセルは「個人または集団の所有する経済的権力の現実の尺度は、経済学において普通考えられている諸要因に依存するのとまったく同じように、軍事的な強さと宣伝による影響力にも依存する。一つの個別科学としての経済学は、非現実的であって、実践上の指針とされれば人を誤らせるものである。経済学は、もっと広汎な研究、つまり権力の科学の一つの要素——たしかに極めて重要な要素ではあるが——にほかならない。」²⁰⁾ と主張するのである。

次に「世論に対する権力」について、「世論は万能で、他の形態の権力はすべて世論から出てくる。世論は社会の事柄の究極的な権力である。」——こういう見解に対してラッセルは、半面の真理を認めるが、そこには世論をひきおこす諸力が無視されていることを指摘する。すなわち、世論が軍事力の本質的な一要素であることは事実であっても、軍事力が逆に世論を生み出すことがあるのも真実である。また、世論を精神的な原因のせいだと考えるのは伝統的であるが、このことはただ直接的な原因についてだけ当てはまるのであって、大抵は背景に何らかある信条に仕える力が存在しているのである。ところがこの信条は、最初から意のままになる力を決してもっているわけではない。広い範囲にゆきわたった世論を生み出す第一歩は、説得によってこそ踏みだされなければならないのである。たがら、説得——信条——世論の関係は、一種のシーソーであるといえよう。

しかし、どの段階にも力の助けをかりずに世論に影響を及ぼした重要な例がある、としてラッセルは、科学の勃興、宗教の創始者の説得、広告の力を挙げている。なかでも広告について、非合理的な宣伝でも欲求に反復して訴えかけられると、事実には訴える合理的な宣伝と同じ効果がある、とラッセルは述べたあとで、信念の分析をする。「信念は、単に伝統的でない場合には、欲求・証拠・反復という数個の要因の所産である。欲求か証拠かがなければ、信念はまったく生まれてこないであろう。」²¹⁾そして、「権力の所有者が信念に影響を及ぼす力を獲得するのは、ほかならぬ反復の効能によってである。」²²⁾ 現在、民主主義諸国において大規模に組織的な宣伝を行なうことができるのは、教会、事業広告業者、政党、金権政治、それに国家である。

「ある社会の権力は、その社会の成員数、経済的資源、技術的能力ばかりでなく、その社会の信念によっても定まるものである。」²³⁾ いったい信条は権力にどのような影響を及ぼすだろうか。ラッセルによれば、狂信主義が権力を獲得した代表的な例は、回教の勃興であり、狂信主義が外見上成功した今一つの例は、クロムウェルに率いられた独立教会派の人々の勝利である。しかし後者は、フランス革命と同じように、狂信者の成功がいかに短命であるかを示している。およそ社会が団結するためには、信条や行動の掟や広く行なわれている感情が、できればこれら三つの結合が必要であり、しかもそれが人々によって自発的に純粋に深く感じられなければならない。しかしながら、思想の自由のないところに科学は栄えず、科学の栄えないところに技術は進歩しないから、教説上の画一性を固執することは科学時代の軍事的能率にとって致命的であるといわなければならない。そしてラッセルは、「もし世界が近い将来にコミュニストとファシストに分かれるようになるとすれば、究極の勝利はそのいずれにも行かずに、肩をすくめて、キャンディードのように『それはうまい話だが、我々は畑を耕さなければならない。』という人々のところへ行くであろう。信条の権力に対する究極の限界は、退屈、倦怠、安逸を求める心によって設定されるのである。」²⁴⁾ と主張する。

5 権力と組織体

ラッセルにとって権力の最も重要な心理的源泉と感情は、伝統的権力においては習慣による尊敬であり、赤裸々な権力においては恐怖と個人的野望であり、革命的権力においては古い信条の代わりに置かれた新しい信条であった。ところでラッセルは、次に、権力を行使する場合に手段となる組織体について考察していく。

組織体は、生物学的には、それ自身の生命をもって成長と衰滅の傾向を有する有機体でもあるが、社会的な組織体とは、共通の目的に向けられた活動のために結合した人々の仲間のことである。それはクラブのように純粋に自発的なものもあれば、家族や一門のように自然の生物学的な集団であることもあり、また国家のように強制的なものもあれば、鉄道会社のように複

B. ラッセルの権力論

雑な混合体であることもある。しかし、組織体はすべて、その性格や意図がどのようなものであるにしても、必ず権力の再分配を伴うものである。したがって、そこには政治というものがないからではない。そして組織が大きくなればなるほど、為政者の権力は大きくなる。つまり、組織体の大きさが加わるごとに権力の不平等は増加し、それと同時に一般成員の自主性は減少して、政府の率先権の範囲が拡大する。為政者のうちにある権力を愛する気持ちが一般成員のうちにある自主性を尊重する感情を凌駕していつて、ついには全体主義の誕生と成功を容易にするようになるのである。

ところで、国家以外の組織体は、その成員に対して行使する権力は法により厳しく制限されているが、これに反して国家がその成員に対して及ぼす権力は、憲法の規定が恣意的な逮捕や掠奪を禁じている限りを除いて、無制限である。有史以来の政治形態のなかで絶対君主制や寡頭政治は、政府が一般成員の欲求に無関心となり、その結果として革命がおこる点に最大の短所がみられる。それにくらべて民主主義は、しっかりと確立されれば、このような不安定に対する安全装置になるのである。ただ統治地域が広がった場合に民主主義をいかにしてうまく続けていくかという問題は難問であるが、しかし、「歴史や人間性を研究する人にとって、民主主義が完全な解決ではないにしても、少なくとも解決の必要不可欠な部分であることは明らかでなければならない。完全な解決は、我々が政治的な条件にみずから限ることによっては見出せるはずがないのである。さらに我々は、経済や宣伝や、環境と教育によって影響を受ける心理をも考慮に入れなければならない。」²⁵⁾

権力の弊害を除去し、権力をいかにして馴致するか。——この問題を考えるまえに、ラッセルは権力と道徳的掟の関係について論及する。道徳には、「実定道徳」と呼ばれる法にもひとしい社会制度としての面があるとともに、「個人道徳」と呼んでもよい個人の良心の問題としての面がある。実定道徳の一つの目的は、大抵無意識的ではあるにしても、現存社会制度をうまく動かす点にある。したがって実定道徳は、権力を配分しなおそうという欲求によって鼓舞される革命的な個人道徳と対立しがちである。親に対する孝行、男性に対する婦人の服従、王に対する忠誠などを説いてきた実定道徳は、大まかにいって、現存する権力——親、男性、王——の側に立って革命の余地を許さず、争いのはげしさを和らげるのに力もなく、新しい道徳的洞察を宣言する預言者を受け入れることもできない。しかし、このような伝統的な実定道徳に反対して、個人道徳の立場から倫理上の偉大な革新者が立ちあがったからこそ、人類の進歩はなされえたのである。個人道徳の依拠すべき究極的な道徳的価値つまり善の概念規定はともかくとして、「倫理上の偉大な革新者は、他の人々より以上にものを知っていた人々ではなかった。彼らは、他の人々より以上に多くを願望した人々、もっと正確に言えば、普通一般の人々よりも非個人的で範囲の広い願望をもっていた人々であった。」²⁶⁾ つまり彼らは、自分たち自身の生活のある要素を尊重したとともに、共感によって自分たちが自分たちのために望んだものを他の人々のために望んだのである。かくして社会生活において、伝統的な実定道徳に対する

謀反は重要である。「謀反がなければ、人類は停滞し、不正は改めがたいものになるだろう。」^[27]

しかし権力は、政治上の争いでも倫理上の争いでも、目的ではなく手段である。しかるに権力哲学——「権力が哲学者の形而上学や倫理的判断の意識的ないし無意識的な動機をなしている哲学」^[28]——は、「人間生活は、統御できない事実と意欲とのたえざる相互作用であるから、権力衝動によって導かれていく哲学者は、我々自身の意志の結果ではない事実が演じる役割りを最小限にみようとするか、あるいはこれを非難しようとする」^[29] ことによって、過度の単純化による権力衝動一辺倒の誤謬を犯しているのである。フィヒテ、ヘーゲル学派、プラグマティズム、ベルグソン、ニーチェなどは、みなその例である。権力愛は、正常な人間本性の一部であるが、権力哲学は、ある意味では、正気ではない。「保証つきの狂人は、その主張が疑われると暴力に傾きやすいから閉じ込められる。保証つきでないさまざまな狂人は、強力な軍隊の支配権が与えられ、彼らの手の届く範囲のすべての正気な人間に、死と災厄とを加えることができるのである。」^[30] 権力哲学は、その及ぼす社会的な結果を考慮に入れると、我と我が身を論破するものである。したがって、「社会生活が社会的欲望を満たすべきであるならば、権力愛にもとづかない哲学に社会生活は基礎を置かねばならない。」^[31]

6 権 力 の 倫 理

権力愛にもとづく哲学を否定したラッセルは、しかし、いうまでもなく、権力一般を否定したのではない。従来、権力を否定した人でも、ある種の形態の権力を否定したにすぎなかったはずである。というのは、さもないければ権力を否定する教説を宣言することすらありえないことになるからである。彼らは、強制的な権力を否定したが、説得にもとづく権力は否定していないのである。

「最も広い意味における権力愛とは、人間の世界であれ非人間の世界であれ、ともかく外側の世界に対して意図した結果を生じさせることができればという欲求である。この欲求は、人間本性の必要欠くべからざる一部であって、精力的な人々においては極めて大きく重要な一部をなしている。どんな欲求でもすべて、即座に満足させることができれば、満足させる能力をもちたいという願望が生まれてくる。したがって、ある形態の権力愛が生まれてくるのである。このことは、最善の欲望にも最悪の欲望にも、ともに当てはまることである。人が隣人を愛すれば、人はその隣人を幸福にする権力をもちたくなるだろう。したがって、すべての権力愛を非難することは人の隣人愛を非難することになる。」^[32]

このように権力および権力愛を考えるラッセルは、しかし、手段として望まれる権力と目的そのものとして望まれる権力とを区別すべきことを述べたうえで、権力の倫理を説く。すなわち、まず第一に、権力愛が情け深いものでなければならぬならば、権力愛は権力より以外の

B. ラッセルの権力論

何らかの目的と結びついていなければならない。いいかえれば、権力が権力より以外の目的に役立つなければ権力が不満であるぐらいに、権力より以外の何らかの目的に対する欲望が強くなければならない。そして第二に、権力より以外の目的が、達成されたときには他の人々の欲求を満足させるのに役立つようなものであることが必要である。このような権力愛は、権力より以外の目的が実現された場合に影響を受ける他の人々の欲求と調和するような目的と結びついていなければならないのである。第三には、自分の目的を実現する手段は、達成すべき目的の美点を圧迫する悪影響を偶然にでも及ぼすようなものであってはならない。たとえば武力は、極めて危険なものであって、武力の行使が過多になれば最初のよい目的までが争いの終結以前に見失われてしまいそうになるのである。

権力愛は、色欲と同じように極めて強い行動の動因であるから、普通に想像されている以上に大抵の人々の行動に影響を及ぼすものであるが、ある人の権力愛がどのような形態をとるかは、ラッセルによれば、その人の気質、機会、技術にかかっている。しかも人の気質は、主としてその人の環境によって作られるものであるから、ある個人の権力愛を特定の径路に向きを変えさせるということは、その人に正しい環境、正しい機会、適切な型の技術を与えるという問題になる。

権力の倫理は、ある種の権力を正しいとし、ある種の権力を不正であると区別することにあるのではない。我々は権力の行使をその結果によって判断しなければならない。したがって、まず我々は、どのような結果を我々が望むのかということについて、心に決めなければならないのである。ところでラッセルは、善なるもの悪なるものは、すべて個人のうちに具体的に表現されるのであって、一義的に社会に具体化されるのではないと考える。もとより、たとえば十分な物質的福祉、健康、知性というような普遍的なものになることができる善なるものに関しては、社会的な協力が可能であるが、しかし、競争での勝利から成るような形の幸福は、普遍的なものになることはできないのである。

「権力をもっている人々（我々はすべて何がしかの権力をもっているのだが）の究極的な目的は、ある集団対ある集団ではなく、人類全体に社会的な協力を促進することではなければならない。現在このような目的に対する主な障害は、非友誼の感情と優越性の欲望とが存在することである。このような感情は、直接的には宗教と道徳によって、間接的には現在このような感情を刺激している政治的・経済的状況の除去によって、減少させることができる。（特に国家間の権力争いや、これに関係のある国民の大産業界の富に対する争いなどは、そうである。）しかし直接、間接二つの方法がともに必要であって、二つの方法は、二者択一的なものではなく、相互に補足するものである。」³⁹⁾

かつて最も権力をもった四人の人として、ラッセルは仏陀、キリスト、ピタゴラス、ガリレオを挙げて、次のように述べている。「これら四人の人はみな国家の支援を受けることなく、その宣伝で一大成功をおさめた。四人のうち誰もその生涯のうちで成功をみたものはいなかつ

た。もし権力が一義的な目的であつたならば、あれほどの影響を人間生活に及ぼすこともなかつたであろう。彼らが求めたのは、他の人々を奴隷にするような権力ではなく、人々を解放するような権力であつた。最初の二人の場合には、争いの源である欲望を克服し、隷属と屈従を打破する方法を教え、後の二人の場合には、自然の諸力を制御する方法を教えたのである。』³⁴⁾ そこでラッセルは、主張する。「人々が支配されるのは、究極的には暴力によってではなく、幸福、精神の内・外の平和、我々が選択の余地なくそこにおいて生きなければならないこの世界についての理解、という人類共通の欲求にアピールする人々の知恵によってである。』³⁵⁾

7 権力の抑制・馴致

『権力論』の最後でラッセルは、権力の弊害を除去し、権力を抑制・馴致する方法について考察する。「いかにして権力を馴致するか」という非常に古くからの問題は、老子の道教では無政府主義が唱道され、孔子の教えを守る儒者たちでは倫理的・政治的訓練の必要性が力説され、プラトンでは哲人政治に解決策が求められた。しかし、すでに言及したようにラッセルは、「歴史や人間性を研究する人にとって、民主主義が完全な解決ではないにしても、少なくとも解決の必要不可欠な部分であることは明らかでなければならない。完全な解決は我々が政治的な条件にみずからを制限することによっては見出せるはずがないのである。』³⁶⁾ と述べて、政治的条件のほかに、経済的条件、宣伝の条件、心理的・教育的条件を順次検討していく。

社会生活を暴政から守るために多数者の支配を原理にする民主主義は、必要なものではあつても、権力を馴致するために要する唯一の政治的条件では決してない。というのは、民主主義においても多数者が少数者に対して獣のような全然不必要な暴政を行使することがありうるからである。国民としての少数者ばかりでなく、宗教的または政治的少数者でも、迫害されることがある。秩序ある政治と両立するかぎり少数者を保護することこそ、権力を馴致するための必要不可欠の一部をなすものである。そのためには、社会が一つの全体として行動しなければならないような問題と、画一性を不必要とするような問題とは区別しなければならないのである。

次に、恣意的な権力を最小限に抑制するために必要な経済的条件であるが、これについてラッセルは、「古風な民主主義と流行のマルキシズムとは、ともに権力の馴致を目ざしてきた。しかし前者が失敗したのは、前者がただ政治的にすぎなかったからであり、後者が失敗したのは、後者がただ経済的にすぎなかったからである。両者を結びつけることなしには、問題の解決に近づくことは不可能であを。』³⁷⁾ と述べて、さらに「すべての大規模な産業と財政を公的に所有し支配することは、権力を馴致するために必要な条件ではあるが、十分な条件となるにはほど遠いものである。今まで存在したどのような純粋に政治的な民主主義よりも、もっと徹底的な、もっと官僚の圧制に対し周倒に備えられた、そしてもっと宣伝の自由を許す慎重な用意を

B. ラッセルの権力論

もった民主主義によって、補われることが必要である。』³⁸⁾と論じている。また、民主主義と絶縁した国家社会主義については、「国家という単一の組織体に権力を集中させることが、極端な形での専制政治の諸悪を生み出させるべきでないとするれば、その組織体の内部での権力が、広く配分され、従属する諸団体が大幅な自治権をもつことが必要欠くべからざることである。』³⁹⁾と主張する。民主主義もなく、官職・権利・義務の移転もなく、法律外の刑罰から免れることもなければ、経済的権力と政治的権力の癒着は、ぞっとするほどの新たな暴政の方便以外の何ものでもないのである。

権力を抑制し馴致するための宣伝の条件については、民主主義諸国においては苦情を申し立て発表したり、法の違反を扇動しないかぎりアジったり、権力乱用や越権の公務員を告発したりすることは可能であって、権力を掌握している政治家はほとんど国民の半数による敵対的批判の対象にされている。しかし、国家が経済的権力を独占したときには、以上のような宣伝の自由がもっと重要なものになってくる。というのは、国家の権力が非常に増大するからである。印刷や新聞が政府の所属になれば、政府がみずからの政策に対し攻撃するものまで印刷することを許すであろうか。「権力が社会主義的または共産主義的と呼ばれるだけで、無責任な権力が、過去のすべての恣意的な権力がもっていた悪い性質を奇蹟的にもたないものになるだろうと想像するのは、単に子供っぽい児童心理にすぎない。』⁴⁰⁾ 民主主義が成功し永続すべきものでありとするならば、あまり憎悪がありすぎたり、暴力を受する気持ちがありすぎたりしない寛容の精神が必要である。

このような点からも権力を抑制し馴致するための心理的条件が重要になってくるが、ある点では最もむずかしい問題である。恐怖や激怒やあらゆる種類の激しい集団的興奮は、人々を一人の指導者に盲目的に追従させやすくし、指導者は大抵の場合に人々の信頼を利用して暴君の地位を確立する——これが権力の心理である。したがって民主主義を保持するためには、一般に興奮を生み出すような状況を避け、民衆がこのような気分には陥らないように教育することが重要である。猛烈な独断の精神が流行しているところでは、人々と合わない意見は治安妨害をひきおこしがちであって、小学生が多少なりとも変わった意見をもっている子供をいじめがちなと同様に、大人も小学生の精神年齢を越えていないものが多いのである。そこでラッセルは、「懷疑精神がまじった自由主義的な感情の広がり、社会的な協力をそれほど困難にはせずに、自由をそれに応じてもっと可能なものにする。』⁴¹⁾と主張するのである。

民主主義は、成功すべきであるならば、一見して相反する方向に向かうように思われる二つの性質が広くゆきわたることが必要である。つまり一方では、ある程度の自力本願的な独立独断性と自分自身の判断をすすんで支持する気持ちが必要だが、他方では、多数者の決議が自分と反対方向にある場合にも、すすんでこの決議に従わなければならない。これら二つの条件のいずれかが欠けると、人々が屈従的になりすぎて精神的な指導者にしたがって独裁政治に入るとか、あるいは一方が自己主張的になりすぎて、その結果は国民が無政府状態に

陥るとか、になるのである。

この点でラッセルは、教育がしなければならないことを、性格と情緒、および訓育に関して次のように主張する。両親や学校のなかには、子供に完全な服従を教えようとする試みから始めるものがあるが、この試みは、民主政治において望ましくない奴隷か反逆者かのいずれかをほとんど生み出すようになる。民主政治では男も女もすべて奴隷や反逆者であってはならず、市民でなければならない。つまり、政治的なものの考え方をふさわしい分量だけ自分ももち、また他の人々もつことを認める人間でなければならない。しかし、一見して高尚な形の理想主義が、愛国心とか階級闘争とかいう名のもとに多数の人々を殺すような特殊な理想主義、残酷な形の理想主義に向かう傾向がしばしば見られるが、これは、幼年時代の不幸な経験によって増加され、もし幼児教育が情緒のうえであるべき姿のものであれば、はるかに軽減されることだろう。「狂信主義は、一部は情緒的な、一部は知的な欠陥である。狂信主義は、人々を思いやりのある人間にするような幸福と、科学的な精神の習慣を生み出すような知性によって、戦われねばならないのである。」⁴²⁾

「民主主義を成功させるために必要な気質は、実際生活のうえでは、まさに科学的な気質と知的生活の關係にひとしい。すなわち、それは懷疑主義と独断主義の中間の宿である。」⁴³⁾ 近代的な形での独裁制は、常に一つの信条、たとえばヒットラーの信条か、ムッソリーニの信条か、あるいはスターリンの信条か、と結びついている。そして、独裁制のあるところでは、若者がものを考えることができないうちに一組の信念が若者の精神に注入され、たえずこの信念が執拗に教え込まれて、この信念から逃れることができなくなるようにされる。もしこのような仕方では二つの相対立する信条が教え込まれたとき、そこに生まれてくるのは、衝突し合う二つの軍隊であって、議論することができる二つの政党ではない。このような独断主義は防がなければならないし、それを防ぐための処置こそ、教育の必要欠くべからざる部分とならねばならない。そこでラッセルは、「もし私が教育の実権をもったとすれば、私はあらゆる時事問題について、あらゆる側に立つ最も熱烈で最も雄弁な主唱者たちに B.B.C. から学校向けに放送させて、それを子供たちに聞かせるだろう。そして後に教師は、放送された議論を子供たちに要約させ、雄弁は充実した理性と反比例するという見解をおだやかにほのめかすだろう。雄弁に対する免疫性を獲得することは、民主政治の市民にとって極めて重要なことである。」⁴⁴⁾ と語っている。

ラッセルにとって「教育とは、教育のない人々の生まれながらの信じやすさと、生まれながらの疑い深さ——陳述が強調されると理由もなしに信じる習慣と、陳述が強調されないと最上の理由があっても信じない習慣——とを中和するように目論むべきものである。」⁴⁵⁾ しかし、そもそも知恵というものは単に知的にすぎないものではない。つまり、知性は行動を導き指示を与えはするが、行動の源泉になる力を生み出すものではない。行動の力は情緒から出てこなければならない。したがって教育は、その情緒をこそ、よりよき方向に向かうべく育成するこ

B. ラッセルの権力論

とを旨ざさなければならないのである。ところでラッセルにとって、人間生活において真に価値あるものは、個人的なものであって、社会の組織ある生活も必要ではあるが、しかしそれは、メカニズムとして必要であって、それ自体において価値あるものではない。我々はさまざまな方法で我々の最善のものに達するのであり、群衆の情緒的な統一結合は、ただもっと低い水準の場合にしか達することができないのである。

ここに、自由主義的なものの見方と、全体主義的な国家観との本質的な相違がある。⁴⁶⁾ つまり、ラッセルによれば、自由主義的人生観は、国家の福祉を究極的には個人の福祉にあると考えるのに対して、全体主義的国家観は、国家を目的と考え、個人を単にその必要不可欠の構成要素と考えると、個人の福祉は支配者の利益をおおう仮面である神秘的な全体性に従属しなければならない、とするのである。『ドイツ国民に告ぐ』フィヒテの要望のまったく正反対のもののこそ、自由主義的教育者の成就したいと望むことにほかならない。かくしてラッセルは、『権力論』の最後を次の言葉で結ぶのである。

「我々が子供たちに、できれば自動車にひかれないように教えるのとちょうど同じように、我々は子供たちに残酷な狂信主義者に破滅されないように教えなければならない。そして、そのために我々は多少懐疑的にして全く科学的な精神の自主性を生み出し、健康な子供たちにとって自然である人生の本能的喜びをできるかぎり保持するように求めねばならない。これこそ、自由主義的教育の課題である。すなわち、支配より以外のものに価値があるという感覚を与え、自由な社会の賢明な市民をつくり出す助けとなり、市民たることと個人の創造性の自由とを結びつけることによって、成就できることをすでに示した若干の人々がいる光輝を人間生活に与えるようにさせることである。」⁴⁷⁾

× × × × × × × ×

ラッセルにおいて権力は、単に政治権力にとどまらず、「意図した結果を生じさせる」ものとして、さまざまな形態をとりながら、それらが相互に依存し作用することによって社会の諸活動を支配する根源的な力である。「権力愛こそ、社会的な事柄において重要な諸活動の原因であり、」したがって「権力愛こそ、社会科学の研究しなければならない諸変化を生み出す主要な動機である。」

政治的権力・経済的権力・世論に対する権力などさまざまな形態の権力を多面的に考察したラッセルは、「人々が支配されるのは、究極的には暴力によってではなく、人類共通の欲求にアピールする人々の知恵によってである。」という立場から権力の倫理を説くとともに、権力を抑制・馴致する方法として政治的・経済的条件、宣伝条件、心理的・教育的条件をすべて考慮に入れる必要があることを主張し、「多少懐疑的にして全く科学的な精神の自主性」を育成する自由主義的教育の重要性を力説するのである。

社会科学の基本概念を権力に見出すラッセルの権力論は、その到達した結論に関するかぎり、彼の倫理思想の場合と同じように、⁴⁸⁾ あまりにも常識的にすぎることでもあるのだら

う。しかし、彼の説くところを常識的と一笑に付するまえに、人間性に対する彼の透徹した洞察にもとづく諷刺をこめた珠玉のごとき文章を一唱三嘆することが必要であろう。資本主義社会において政治的権力と経済的権力が癒着する今日、はたして、ただ単に経済的権力に政治的民主化を拡大する社会主義の方向によってのみ、問題は解決されるものであろうか。ラッセルとともに、問題解決の方策を教育などの人間改革の諸条件にも求めなければならないと考えられるのである。

<注>

- 1) Bertrand Russell : Power : A New Social Analysis, 1938 pp.10~12
- 2) Bertrand Russell : Human Society in Ethics and Politics, 1954 p.175
- 3) Bertrand Russell : Power, p.7
- 4) Ibid., p.9
- 5) Ibid., p.10
- 6) Ibid., p.13
- 7) Ibid., p.23
- 8) Ibid., pp.23~24
- 9) Ibid., p.25
- 10) Ibid., p.30
- 11) Ibid., p.32
- 12) Ibid., p.34
- 13), 14) Ibid., p.35
- 15) Ibid., pp.35~36
- 16) Ibid., p.84
- 17) Ibid., p.106
- 18), 19) Ibid., p.123
- 20) Ibid., p.139
- 21) Ibid., p.144
- 22) Ibid., p.145
- 23) Ibid., p.149
- 24) Ibid., p.161
- 25) Ibid., p.286
- 26) Ibid., pp.257~258
- 27) Ibid., p.263
- 28) Ibid., p.264
- 29) Ibid., p.265
- 30) Ibid., p.270
- 31) Ibid., p.273
- 32) Ibid., pp.274~275
- 33) Ibid., pp.283~284
- 34), 35) Ibid., p.284
- 36) Ibid., p.286
- 37) Ibid., pp.297~298
- 38) Ibid., p.303
- 39) Ibid., p.305
- 40) Ibid., p.307
- 41) Ibid., p.308
- 42), 43) Ibid., p.312
- 44) Ibid., pp.313~314
- 45) Ibid., p.314
- 46) Ibid., p.317
- 47) Ibid., p.319
- 48) 拙著『ラッセルの社会思想』p.40

——1975, 7, 24脱稿——